HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第39号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2013-04-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73590
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
File Information	DRFmonthly_39.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

月刊 DRF
Digital Repository Federation Monthly

第39号
No. 39
April, 2013

【特集１】OAはだれのものか？　after Finch 英国レポート
【特集２】著者1万5,000人のOA意識
--ほか　バトンタッチ！　2013OA/IRイベントカレンダー

特集1

OAはだれのものか？
after Finch　英国レポート

英国の最新事情を一橋大学の柴田さんと尾城さんがレポートします。

a. Univ. London, the School of Oriental and African Studies (SOAS)
b. SOAS Libraryの大きな吹き抜け
c. Univ. Manchester Alan Gilbert Learning Commons　ラーニングコモンズ専用の建物です。

評価の枠組みへの懸念

また、現在イギリスでは、高等研究機関に対する研究助成金配分の根拠となる、研究評価の仕組み（RAE: Research Assessment Exercise）の改訂作業が進められており、「研究卓越性枠組み（REF: Research Excellence Framework）」として2014年から実施されることになっています。

さらに、この次の枠組みREF2020についても既に議論が始まっており、そこではOAについても言及されるようです。これについて、研究者が自身の研究成果をどのように扱うのか、その自由が制限されてしまうのではないかということが懸念されているようでした。

2013年3月11日（月）から5日間、英国の大学（ロンドン大学アジア・アフリカ研究院、マンチェスター大学、ノッティンガム大学）を訪問し、IRやOA等に関して、図書館関係者にインタビューを行ってきました。

今回の大学訪問では、フィンチレポート後の大学の反応やその後の対応を聞きたいと思っていました。

Goldと並行してIR活用によるOAサポートを
（マンチェスター大学）

マンチェスター大学図書館では、2009年よりManchester eScholarという機関リポジトリを進めてきました。また数年前からは図書館経費からAPC*のファンディングを試みていたそうです。

今回のフィンチレポート等を受けて、図書館の研究支援担当者は、学内でOA出版する際の方針案を作成中とのことです。担当者は、ゴールドOAに大きく舵を切るのではなく、現存しているIRに出版機能を加えたものでOAのサポートをしていきたいと話していました。たとえば、編集機能の強化、コンテンツ登録の為のwebフォームの構築、テキストのハーベスト等です。その方がゴールドOAよりもコストがかからず、今まで培ってきたノウハウやリソースを生かしたまま活用できる、とのことでした。

一部では、OA機能を既存の大学出版局に委ね、IRも今後必要ない、という大学もあるそうです。とはいえ、ここ数年はOAに関しては様子見（”wait & see”）であろうとのことでした。

*APC：Article Processing Charge、論文出版加工料等と訳される。雑誌の読者ではなく著者がAPCを支払うことによって、誰もが自由に雑誌（または論文）にアクセスできる。

d. Univ. Manchester, John Rylands Library 1890年に建てられた歴史的図書館で、市民や観光客も入館できます。
e. Univ. Nottigham, Hallward Library 英国大学一入館者数の多い図書館だそうです。

第4面に続く

特集2

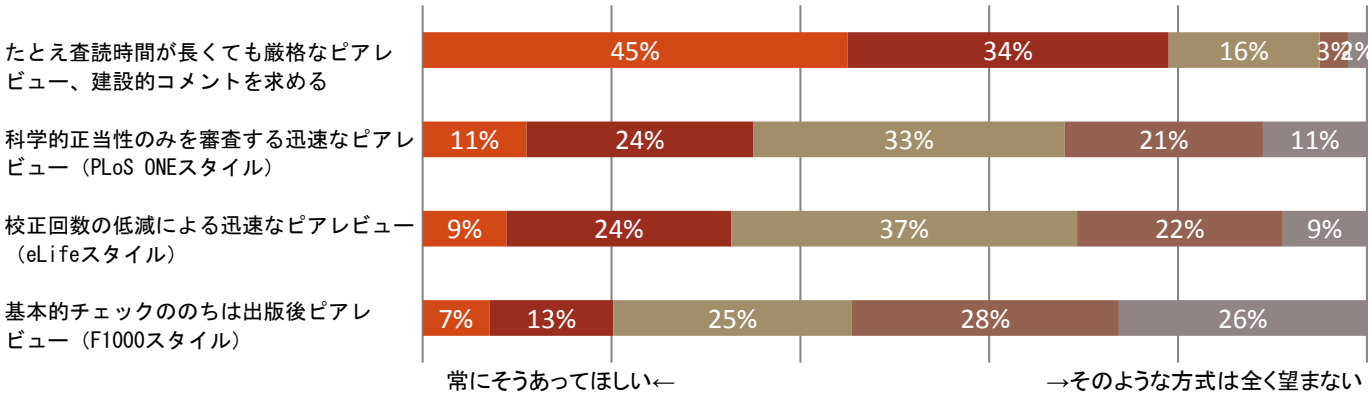
著者1万5,000人のOA意識

Open Access Survey: Exploring the views of Taylor & Francis and Routledge authors を読む

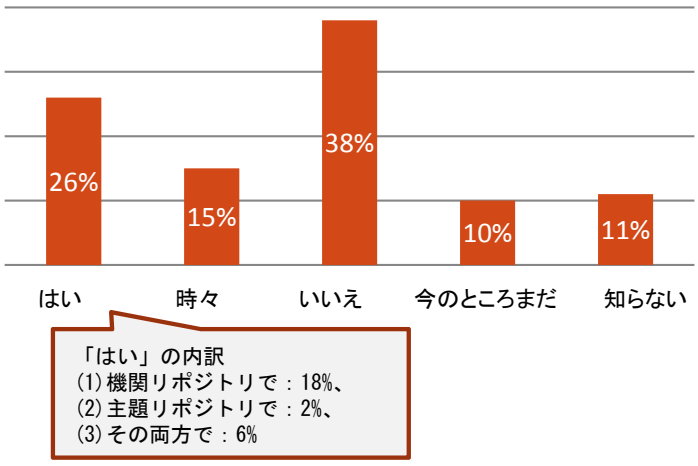
Taylor & Francisが、調査報告書「Open Access Survey: Exploring the views of Taylor & Francis and Routledge authors」（2013年3月）を公表しました。 Taylor & Francis刊行誌に論文が掲載された著者に対して行われた、オープンアクセスに関する意識や行動についてのアンケート結果です。
回答者総数は14,769名、日本からの回答者は119名であったとのことです。

以下では、同報告書から代表的ないくつかの調査結果を紹介します。報告書の全体は、
http://www.tandf.co.uk/journals/pdf/open-access-survey-march2013.pdf をごらんください。

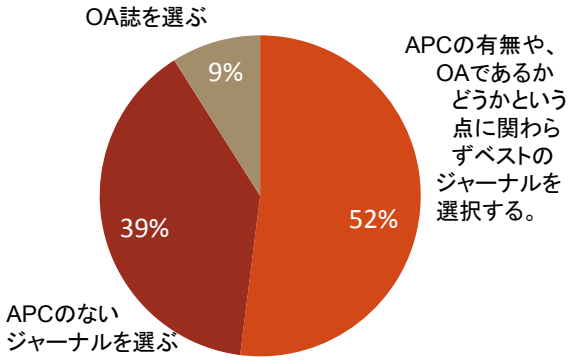
Q あなたの論文をオープンアクセス出版するにあたっては、どのようなピアレビューがふさわしいと思いますか？



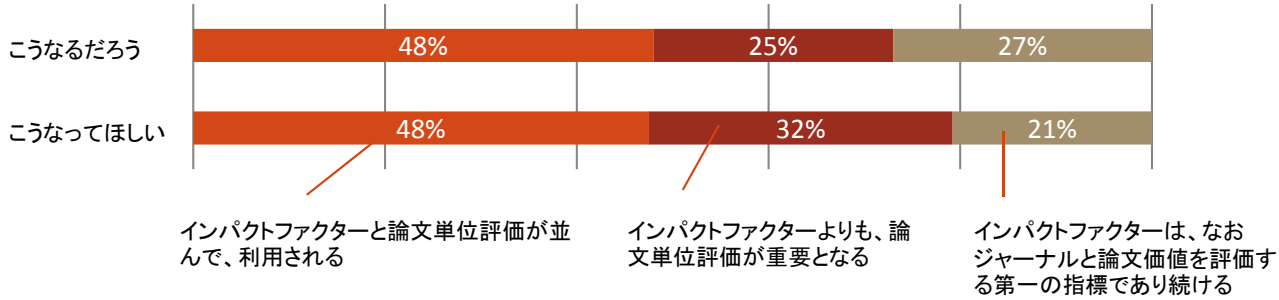
Q 所属機関はあなたの自著論文をリポジトリ登録することを求めていますか？



Q 論文投稿先をどうやって決めますか？



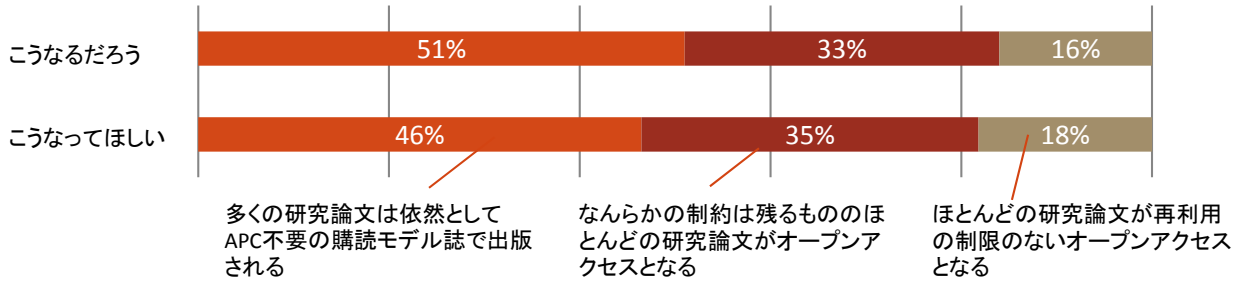
Q 研究論文の価値計量指標は、次の10年間にどうなる、どうなってほしいですか？



特集2

著者1万5,000人のOA意識

Q OA出版について、次の10年間に起きそうなこと、起こってほしいことは？



Q 学術論文はどのように変化し、あるいはどのようなものに取って替わられていくと思いますか？

- 予測できない変化が起きる 77
- マルチメディア 69
- ブログ 67
- オンラインオンリー誌が増加 35
- 書籍の復権 43
- より公衆向きの科学研究 44
- オープンアクセスの興隆 51
- データベースとの融合 31
- 異分野コラボの増加 31
- 無料アクセス 28
- リポジトリ利用の増大 23
- 科学の社会貢献 19
- 論文がより短く 18
- オンラインフォーラム 17
- ソーシャルメディア 16
- 自力出版 16
- より速い出版 14
- Wiki 14
- ピアレビューの減少 11
- 品質低下 10
- 特許 10
- 研究データの公開 10
- 論文は主たる研究成果公開媒体でなくなる 8
- 学術雑誌の減少 7
- 個人間の交換 7
- オンラインコメント 7

ほかには、出版社消滅、ディストピア、というような過激な意見もあったようじゃの。

London School of Economics and Political Science (LSE) Library

特集１ つづき

今回イギリスの大学を訪問してみて、担当者の口から発する共通の言葉は”surprising” 、”confusion”でした。これまでやってきたIRとはアプローチの異なる、ゴールドOAの推奨、さらに短期間でOAを実現しなければならないという方針に、大学図書館の焦りやとまどいが見えました。とはいえ，大学図書館は、方針案の策定、 APCの全学的とりまとめなど、積極的な活動を行っていることが分かりました。 **（柴田育子：写真右）**

ノッティンガム大学では社会科学分野の担当者にお話を伺うことができました。たまたまその方がSocial Science Directory（*2012年に創刊した社会科学分野のオープンアクセス誌。 機関会員契約すると、所属教員は1年間投稿し放題）の機関会員契約 について提案されたご本人だったということで、その理由を尋ねてみると、「成功するかはわからないし、正しいかもわからないが、とりあえずやってみることが大事だと思った」との回答がありました。新しい試みに対する 「投資」に近い感覚なのかもしれません。

事態を静観するだけでなく、自分たちもまたOAの当事者として、やれることをやっていこうという姿勢が印象的でした。

（尾城友視：写真左）

Fish & Chips!

バトンタッチ!

4月は人事異動の季節。
今回リポジトリの担当を離れる方々、後任の方々に、メッセージをいただきました。

三隅　健一（留任）

北海道とともに世界へ！　たくさんの先輩方の築いてきたHUSCAPに 係ることができてうれしいです。研究室訪問、頑張るぞー！

●北海道大学

城　恭子（離任）

H24年度は図書館内他部署と協働での研究室訪問を 積極的に行いました。

リポジトリ業務は研究者との対話が重要なので、来年度もたくさんの研究室を訪問して、HUSCAPファンを増やしてほしいです。

私はサービス部門に異動になりますが、これからも HUSCAPチームと連携を図っていきたいと考えています。

●広島大学

濱　知美（離任）

この3年間、いろんなことに挑戦し、最近、自発的な登録依頼も増えてきたように思います。DRFで他大学の方々に業務の悩みを相談できるようになったことも大きな財産です。異動先のサービス部門でも、この経験を活かしていきたいと思います。

4月からは学位規則改正への対応など、課題が待ち受けていますが、外に向けてアンテナを張っておくことも忘れずに。迷った時は「こんなリポジトリにしたい」「自分が著者の立場だったら、この方がいい」という思いに立ち返ってみてください。きっと、著者からの「ありがとう」という言葉が支えとなり、前進する力になるでしょう。

佐々木　翼（新任）

Challenge for Smile　HUSCAPを通じて研究者に笑顔を！

2013 OA/IR イベントカレンダー

5月6-8日　COAR年次集会（トルコ）
6月6-7日　CSI委託事業報告交流会（東京）
7月8-12日　Open Repositories 2013 (カナダ)
9月23-26日　International Symposium on Electronic Theses and Dissertations（香港）
10月　Open Access Week（21-27）

※機関リポジトリ新任担当者研修（詳細未定）

平成25年度DRFの活動について

お知らせ

○情報共有活動
　-DRF Wiki
　-DRFメーリングリスト
　-月刊DRF
　-Facebook
○翻訳活動
○新規参加機関の受付

左記についてこれまでと同様に継続していきます。
今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

次号予告
DRF新体制
ほか

facebook　http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation
読者アンケート　http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html

月刊DRFでは、皆様からのお便りをお待ちしています。
gekkandrf@gmail.com

月刊DRF第39号　平成25年4月1日発行　デジタルリポジトリ連合　http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?月刊DRF